

---

# 月の光と葵の乙女～天正争乱～

三好八人衆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月の光と葵の乙女〜天正争乱〜

### 【Nコード】

N8441V

### 【作者名】

三好八人衆

### 【あらすじ】

普通の高校生だった鷹村聖一が、戦国時代の登場人物の一部が女性として活躍している戦国日本に降り立ってそれなりの月日が流れた。勢力図は一変し、新たな時代へと進んでいくにつれて聖一と仲間たちは新たな戦いへと巻き込まれていく・・・

## 簡単な登場人物紹介（前書き）

10月1日：『鷹村秀康』を追加しました。

## 簡単な登場人物紹介

主人公&ヒロイン

たかむらせいいち  
鷹村聖一

この物語の主人公。現代日本の高校生だったが、ある日、女性武将が存在する世界にタイムスリップしてしまう。世間からは広がった噂から『月の使者』と呼ばれている。拾ってくれた三河徳川家に仕え、弓の名手として、軍師として頭角を現していった。性格は温厚で、怒ることはめったにないが、強い意志を持つ少年である。

今作では家康と夫婦になり、彼女との間に2人の子供を儲けている。

とくがわいえやす  
徳川家康

三河・遠江を統べていた戦国大名徳川家の女当主。聖一とともに勢力を広げ、武田家滅亡後は三河・遠江・駿河三ヶ国を治める大名に成長した。

今作では大名として、母として奮闘する。

まつひめ  
松姫

家康の娘。弟の福松丸とは違って大人しく、無口な性格。武術には疎いが政務に関して才能を示している。徳川家の嫡子。

ふくまつまる  
福松丸

家康の息子。姉の松姫とは違い、活発でやんちゃな男の子。武術全般に明るく、徳川家臣からは将来を期待されている。

たかむらひでやす  
鷹村秀康

聖一の養子。小麦色の健康的な肌と短く刈りこんだ黒髪でボーイッシュな印象の少女。武芸の才に秀でている。

## 家臣団

ここでは、前作から登場する家臣団を簡単に、今作から登場する家臣団を少し詳しく紹介する。

徳川四天王

さかいただつく

酒井忠次

前回から登場した徳川家臣団筆頭。三河吉田城代であり、家康の叔母の夫として年若い主君を支える偉丈夫。

ほんただたかつ

本多忠勝

愛槍・蜻蛉切を手に無双の武を奮う銀髪の少女。今日も徳川軍の先陣を切って、主君に勝利をささげる。

さかきほらやすまき

榊原康政

通称小平太。徳川家のマスコットの存在だが、戦場では頼りになる旗本部隊長。

いしなおまひ

井伊直政

今作から登場。遠江国井伊谷城主。氷のような青い瞳に青い短髪が特徴。冷徹な性格の少女で、男を毛嫌いしており、聖一のことも嫌っている。

その他の家臣団

とりいもとただ

鳥居元忠

前作から登場の徳川家の『お姉さん』的存在。いつも微笑みを絶やさないが、おこると誰よりも怖い・・・らしい。

はうとりはんぞう

服部半蔵

徳川家の隠密頭。半蔵は通称で本名は正成。まさなり隠れナイスバディ。

わたなべもりつな

渡辺守綱

徳川家に仕えるもう一人の半蔵。主に聖一に仕え、彼の護衛を主な任務にしている子犬のような少女。

ほんだしげつく

本多重次

通称『鬼作左』。ザ・頑固親父。

いしかわかずまさ  
石川数正

徳川家の重臣で、岡崎城代。忠次とともに聖一を拾いに行った。広い視野を持つ人物だが……

おおくぼただよ  
大久保忠世

ただすけ  
弟・忠佐とともに徳川家に先代から仕える重臣で、家康が信頼を寄せる人物の1人。

さかいえつく  
酒井家次

今作から登場。忠次の子。豪快な父・忠次とは違い、冷静な性格で丁寧な口調の少年。鉄砲隊を率いる部隊長であり、彼自身も鉄砲の名手である。

おおくぼただちか  
大久保忠隣

今作から登場。忠世の子。口下手で『あうあう』が口癖の金髪のツインテールの少女。家康に対する忠誠心は高いが、少々空回りしてしまいがち。家次のことが好き。

……以下、どんどん増えていく予定です。

## 簡単な登場人物紹介（後書き）

『姫名』について

歴史上初の女性当主であった鎌倉幕府初代将軍・源頼朝みなもとが平清盛に捕らわれた時に、父への復讐を目指して生き延びるために名を使い分けた。そのエピソードを基に、女性が武の道を志すときは『男性としての名』と『女性としての名』を持つようになり、それが発展して『女性としての名を夫にのみ明かす』という風習が広まった。

大抵の場合、幼名の一字を取って姫名とする場合が多いが、幼名に『姫』がつく場合は幼名が姫名になり、元服後はその名では呼んではいけなくなる。

## プロローグ

ボンヤリと、意識が現実の世界に打ち上げられていく。ふすま越しに耳に届く雀の囀りに、朝が来たことを悟る。朝の目覚めが早いことが数少ない取り柄の青年は、眠い目をこすりながら体を起こした。

取り立てて特徴のない青年である。黒髪に黒目とこの国の人間の標準的な容姿で、顔は・・・まあまあ整っているといったところか。

『2枚目にあと少しで手が届きそう』な感じが。しかし彼がただ人ではない一面があった。

青年の名は鷹村聖一。たかむらせいいちこの戦国時代の日本に迷い込んだ現代高校生だった青年である。

「ふにゅ・・・」

ゴソゴソと彼の蒲団から這い出してきたのは、乱れた寝巻を纏った長い黒髪の女性。普段は強い意志を秘めているその瞳はいまだに眠そうであるが、少し時間が経てば彼女は誰よりも立派で、凛々しい君主になることは彼と彼女の家臣たちは知っている。

彼女の名は徳川家康。とくがわいえやす三河・遠江・駿河の三ヶ国の太守にして、『東海の弓取り』と呼ばれる英傑。そして、現代高校生だった鷹村聖一青年とは夫婦である

「おはよう、竹姫たけひめ」

「おはようございます、聖一さん」

彼ら夫妻の朝は、向かい合つてのあいさつから始まる。これは出陣してるとき以外は欠かさず行つ、決まりごとのようなものだ。

ちなみに聖一は家康のことを『竹姫』と呼んだが、これは『姫名』と呼ばれるもので夫の聖一しか呼ぶことが許されない秘密の名前である。

「さてと・・・今日の予定はなんでしたっけ？」

「茶屋殿の案内で、堺見物ですよ。早く着替えましょう」

聖一と家康、そして彼女の家臣たち20名弱は今、織田信長に武田家滅亡後に駿河を拝領した礼を述べに上洛し、その帰りに京で店を構え、徳川家とは昵懇の仲である茶屋ちややしろ四郎次郎清延しろうじろうきよのぶの堺の屋敷に逗留していたのであつた。

歴史上、深い謎に包まれた事件の幕開けは、夫婦にとって何の変哲もない朝から始まつた。

家康と聖一が着替えを終えて朝食の席に顔を出すと、福顔の中年男性が2人を待つていた。

「おはようございます、三河守みかわのかみ様に鷹村様。昨晚はよう眠れましたか」

「おはようございます、茶屋殿。おかげさまで、よく眠れましたよ。彼はこの屋敷の主にして、京でも有数の豪商である茶屋清延ちややしろのぶ。かつては武士だったが、父の代に廃業して今は呉服商を営んでいる。ち

なみに家臣たちは別の場所で朝食に舌鼓を打っているようだ。茶屋も部屋を退いて、静かな朝食を食べ終えた2人はしばし談笑する。

「松姫も福松丸もお利口さんに行っているでしょうか？」

ここで話題に上るのは、2人の愛しい我が子のこと。浜松城で留守を預かっている姉的存在に世話を任せているが、大人しい娘はともかくやんちゃな息子の世話は手が焼けるだろう。

「大丈夫だよ。2人ともいい子だから大人しく待っていてくれるよ」

その時だった。

ドタドタと慌ただしい足音が響き、『殿！殿！』と家康を呼ぶ家臣の音がする。

「平八の声ですね」

ほんだへいはちろうただかつ

平八 本多平八郎忠勝は、2人の部屋の前で膝を折って「失礼いたします」と声をかける。中にいた2人は、自然な動きで上座とそのそばに控える。仲のいい夫婦の時間はここで終わり、主君と家臣の関係に戻る。

「入りなさい」

「はっ」

入室を促す主君に従ってふすまを開けた忠勝だったが、明らかにいつもとは様子が違う。明らかに慌てた様子であり、朝食を抜け出してきたのか未だに口元にご飯粒がついている。

「どうしたんですか、忠勝？ああ、口元にご飯粒が……」

「ご飯粒の事は今はどうでもよいのです！……無礼なのは承知しておりますが、緊急のことゆえお許しを」

忠勝は深く首を垂れると、その口から今日の明け方に起こった出来事を報告した。

「明智日向守、謀叛！織田信長公、本能寺にて討死！」

「え……？おねえ……さまが……討死？」

呆然とする家康。聖一も表面上は冷静を保ちながら、心の中では「ありえない」と連呼していた。

（そんな馬鹿な……あの明智殿が？）

この頃に『本能寺の変』が起こるのもわかっていた。光秀は京で徳川家の接待役を行っていた。すべて史実通り。だが

（信長殿に絶対の忠誠を誓っていた彼女が？）

信長の重臣として、愛人として仕えて寵愛を受けていた彼女が謀叛を起こすなんて考えられなかったのだ。

「……確か息子の信忠殿のふただも京にいたはず。彼は？」

信長によって家督を譲られ、当主となっていた織田信忠も先日会っていた。

「明智が本能寺で信長公を討った後、二条城で京都所司代村井貞勝殿たちとともに明智軍と戦い……」

続きは口にしなかったが、信忠や貞勝がすでにこの世にないという

のは知れた。

「・・・すぐにでも、明智勢は僕らを殺しに来るだろう。茶屋殿にも話して、すぐに堺を脱出しよう」

「分かった。すぐに手配しよう・・・殿を頼むぞ」

忠勝が急ぎ足で出ていく。ふすまが閉められた後、聖一は懐に主君を抱いた。

押し付けるように抱きしめたのは、彼女の泣き声が屋敷中に響き渡らないようにだ。

「ぐすつ・・・聖一さん、ありがとうございます」

思う存分泣いたのだろう。目を真っ赤にしながら、彼女は礼をしてきた。

「聖一さん、帰りましょう。私たちの故郷に」

「うん。絶対に生きて帰ろう！」

準備を整えた後、茶屋や家臣たちと相談した結果・・・すでに封鎖されているであろう、近江を通って帰国する道はあきらめ、伊賀国を通って古くからの織田領である伊勢国から海路三河へ帰るといふ方針に決まった。

「伊賀越え・・・ですな」

一行の中では最年長の酒井忠次さかいただつぐが厳しい表情を浮かべ、彼の隣に座る大久保忠佐おおくぼただすけも嘆息する。

「信長公の命もあつたとはいえ、三介殿さんすけは少々やりすぎました。かの地の民が、織田と同盟している我らもともに恨んでいる可能性もあります」

三介殿とは信長の養子の1人である織田信雄おだのぶかつの事である。信長には

実子・養子を含めて3人の子がいる。実子の信忠に養子の信雄・信孝だ。

養子の2人はともに一族の子で、それぞれ北畠氏・神戸氏という伊勢の名家との和睦の際に後継ぎとして送り込まれる際に、形として信長の養子にしていた。

しかし信雄は武将としての器量に乏しかった。以前、信長に無断で伊賀侵攻を行った上に惨敗を喫して叱責を受けている。再度攻め込んだ際にはその鬱憤を晴らすかのように伊賀を徹底的に攻め立ててかの地を焦土と化したのだ。

「しかし、織田領ですらない紀伊や明智が網を張っている近江を通るわけにはいきますまい」

「大和は明智派の筒井順慶の領地だし・・・伊賀を通るしかないってことだよな」

忠勝と康政の言うとおりだった。三河へ戻る一番の安全なルートは、伊賀しかないのだ。

「よし、出立しましょう！」

『ははっ！』

こうして、『神君伊賀越え』は幕を開ける

## 神君伊賀越えの章 第一話

徳川家一行は茶屋四郎次郎清延と、父親が伊賀国出身で、国人とのパイプを未だに持つ服部半蔵を道案内にして堺を脱出して伊賀国に入った。徳川家の一行は家康・聖一をはじめとして道案内の服部半蔵に酒井忠次・大久保忠佐・本多忠勝・榊原康政・渡辺守綱・石川数正とお馴染みの面々に

「・・・なんだ、貴様」

「・・・なんでもないよ、直政」

「なら視線を私に向けるな、穢れる」

目が合っただけで聖一を罵倒する絶対零度の視線の持ち主は、井伊直政おまさという少女だ。氷のように青く、冷たい瞳に青い短髪から『氷女』と陰口を叩かれているが、家康への忠誠と将として有能であることは万人が認めるところ。ちなみに目があっただけで聖一を罵倒するが、忠次や忠佐など目上の男性の武将にはきちんと相手の立場に見合った対応をするため、目があっただけで罵倒される男は敵以外では自分だけらしい。

・・・泣いていいですか。

「へみゆー！」

可愛らしい悲鳴を上げて木の根っこに躓いて転んだのは、徳川家一行の最年少の少女。金髪のツインテールが可愛らしい小柄な女の子だが、彼女はただのドジッ子ではない。

徳川家臣大久保忠世の嫡子・大久保新十郎忠隣おおくぼしんじゅうたかである。今回は叔父の忠佐について一行に加わっていたのだ。

「ほら、新ちゃん」

「ほえ・・・あ、ありがとう小五郎君」

その彼女に黙って手を差し伸べたのは、小五郎と呼ばれたメガネの少年。彼に助けてもらった忠隣は、頬を薄く染めた。

少年の名は酒井小五郎家次さかいしゅうごろういえつき。徳川家臣団筆頭・酒井忠次の嫡男で忠隣の想い人である。それぞれ通称の『新ちゃん』『小五郎君』と呼ば合っている。ちなみに忠世は忠隣を溺愛しており、「新十郎を欲しくばわしの屍を超えて行け！」と親バカぶりを発揮している。

徳川家一行は、宇治田原から近江国甲賀の小川城を経て伊賀に入った。途中、襲ってきた土民には茶屋が金銭を渡して退いてもらうなどしたが・・・

「我らの所持金目的に襲ってくる輩は、金銭を渡せば退いてくれますが・・・織田家に恨みを持つ者は、金では退いてはくれませう。戦闘力を持たない茶屋は、家康や聖一の近くで歩を進めている。彼は汗をぬぐいながら、そう忠告した。

「例えば・・・彼らのように、か？」

家康のすぐ前を歩く忠勝が、前を向いたまま後ろを歩く茶屋に問いかけた。一行の目の前に、竹槍やむしる旗を掲げた土民の群れが現れた。彼らが持つ旗の一つには、何かをくるんだ球体の白い布が掲げられていた。

「忠勝、彼らはどう考えても金銭目的じゃないぞ」

「織田の代官を討ち取った後・・・というところか」

先頭を歩く半蔵が刀を抜き、それを合図に徳川家臣団も抜刀する。一行の中には武将だけではなく茶屋や侍女など非戦闘要員もいるため、前に出て戦う者と後方で家康と弓を使う聖一、そして非戦闘要

員を守る者に分かれることになる。

士民たちは憎々しげな表情でこちらを睨みつけ、竹槍を構えてくる。彼らは相当な憎しみを持ってこちらに襲い掛かってくる・・・その執念を侮ってはならない。大切な者を奪われた彼らには同情はできない。だが・・・

「私たちは、ここで斃れる訳にはいかないのです」

徳川家康には夢がある。

三方ヶ原で敗れ、大切な人を失いかけ・・・我が子が生まれ、大切な人と我が子の無垢な笑顔を見るたびに、膨れ上がってきた思い・・・『天下泰平』。

「押し通らせてもらいます！」

家康の号令を合図に、伊賀山中を舞台に士民と徳川家臣は激突した。

## 神君伊賀越えの章 第二話

普段から武芸の鍛錬を欠かさぬ武士と農業に勤しむ土民が戦えば、普通なら武士が勝つ。しかし、どちらも人間である。平安の木曾きその冠者源義仲や南北朝時代の新田義貞にったよしさだが一矢を受けて討死したように、急所に攻撃を受ければ身分問わずに死に至るのである。だから伊賀山中での戦闘でも、徳川家臣たちは竹槍を手に迫ってくる土民を相手に気を抜けぬ戦いを繰り広げていた。

徳川一行の陣形は先頭に服部半蔵・本多忠勝・酒井忠次・榊原康政・渡辺守綱が、家康と弓を使う聖一、そして数名の侍女と茶屋の護衛には大久保忠佐・井伊直政・酒井家次・大久保忠隣などが付く形である。

シュッ!

「ぐあっ!」

シュツ！  
「があつ！」

聖一の正確無比な弓さばきから放たれる矢に射抜かれて、次々と土民たちが斃れ伏していく。容赦はしない。その油断こそが、戦場では命取りになることをわかつているから。

「見事な腕前ですな・・・さすがは『いまよいち今与一』鷹村聖一殿」

次々と土民を仕留める聖一の腕前に、茶屋が感嘆の声を上げる。平安の昔、弓の名手として知られた那須与一宗隆なすのよいちむねたか（資隆すけたかとも）に例えられる聖一の腕前は、数々の戦いを経て今や日本国中にその名は鳴り響いていた。

前線でも百戦錬磨の徳川家臣団はリーチの差で有利な土民の懐に飛び込んで斬りつけ、追い払うことに成功した。

「さあ、急ぎましょう。いつ連中が戻ってくるかわかりませぬからな」

後の現代日本では、よく知られている明智光秀による軍事クーデター『本能寺の変』も当時は現代との情報網の差もあり、なかなか地方に知られるのは遅かった。当時、織田軍は北陸・中国・関東・摂津などで地方軍を展開させていた。織田軍の中でいち早く情報を知ったのは摂津で四国へと渡る準備をしていた信長の子・信孝

擁する軍だったであろうが、信孝と彼を補佐する丹羽長秀は動くことができなかった。そしていち早く動いたのは皆さんご存知のあの人物である。そのなかで、敵対勢力の中でいち早く動いたのは関東・北条家であった。

関東北条氏4代当主・北条相模守氏政は嫡子氏直を総大将に擁した5万余の兵を織田家の関東管領・滝川左近将監一益の守る上野国に派遣した。

滝川一益は2万の軍を率い、居城の厩橋城を出て神流川で北条軍を迎撃。一度は撃退することに成功するが、体勢を立て直した北条軍の策に乗り大敗を喫した。一益は上野から本拠地のある伊勢長島城に逃げ帰り、武田家滅亡後、武田家の旧領信濃に領地を得た織田家の武將たちも信濃を放棄して逃げ帰り、信濃・上野の国人たちは次々と北条の軍門に降った。

また、武田の本拠だった甲斐国を預かっていた川尻秀隆も武田旧臣が中心となって起こした一揆に討たれ、甲斐・信濃は主なき空白地帯となった。徳川家は主君不在で動けず、北の越後国・上杉家は内乱と越中まで出てきていた柴田勝家軍に抑えの兵を割かれており、川中島に出て北条軍と睨み合うのが精いっぱいであった。

その中で徳川家は主君や仲間たちが生きて帰ってくることを信じ、留守を預かる大久保忠世・鳥居元忠を中心に軍を編成させていた。

いつでも主君の命令で軍事行動が起こせるように、臣下として準備を怠ることはできない。家康が帰ってきたとき、その時こそ徳川家の飛躍の時だと徳川家臣団の誰もが思っている。

神君伊賀越えの章〜第三話〜（前書き）

- ・ 今回の章は短めにすることにしました。今月はちょっと忙しいので
- ・

### 神君伊賀越えの章〜第三話〜

いがのくに  
伊賀国

現在の三重県西部に位置するこの国は、戦国時代は山に囲まれ『隠し国』とも呼ばれたこの国は足利一族の仁木氏にぎが守護を務めた。

しかしあまり支配力は強くなく、道路の整備なども整っていないかったこの地には地元の間人しか知らない廃寺がいくつもある。そのひとつに、武器を携えた土民が密かに集っていた。

「・・・お、おい。そりゃ本当か？」

「ああ。間違いねえ。あの鬼みてえな女は明智様に討たれた。その明智様がな、この伊賀を徳川の一行が通るって情報を下さったんだ」  
下卑た笑いを浮かべる男は、持ってきた書状を仲間に向かって読み上げた。

「これは明智様の家臣の齋藤内蔵助様さいとうのぞくすけから頂いた書状だ。これを要略すると・・・『徳川一行は伊賀を通過して三河へ戻ろうとするだろうので、これを阻止すること。男は皆殺し、女は捕えて好きにしてよい。ただし徳川家康だけは必ず捕えて京に送ること』だ。徳川の女どもは上玉揃い・・・いいか野郎ども！女は捕えた者が所有権を得る！早い者勝ちだ！」

首領格であつたらしい、書状を持った男の号令にその場にいる者たちは雄叫びをあげた。

・・・天井の戸板から2つの目が覗いているのにも気が付かず。

「む……?」

伊賀の山中を歩く徳川一行の先頭を歩く服部半蔵が『それ』を見つけたのは、何の変哲もない道に転がっている石の上だった。青・黄・赤・紫・黒に色付けされた米粒が、石の上を彩っており、一見すれば首をかしげて通り過ぎるようなものだが、半蔵にとっては意味がある物だった。

これは『五色米』といい、忍者が暗号として味方にメッセージを伝えるための手段の一つである。予め決めておいた配列などで味方に情報を伝えるのだ。味方からの情報を読み解いた半蔵は、味方の進軍を止めて家康のもとへ馳せ参じた。

「この先に敵が?」

「御意。我が服部家の情報網からの情報故、確かなものかと。少し険しくはなりますが、伊賀を抜ける近道がありますので、そちらに道を変えてはいかがでしょうか?」

今まで半蔵はなるだけ家康の足に負担がかからないように、また、整備されていないながらも少しはマシな道を選んで来たが、これからも敵が待ち伏せている可能性が高いことは否めなかった。さらに連戦、連戦となれば、いかに戦慣れた武将たちとはいえ疲れはたまって動きも鈍るだろう。

「……そうね。では、そちらを通りましょう」

半蔵に案内された抜け道は、まるで人が通らないような獣道であった。先頭が伸び放題の草木を斬り捨てながら進む。時折草むらから小さな物音がするたびに刀に手がかかるが、出てくるのは狸や狐の類ばかり……物音の度に神経が磨り減らされ、あまり体に良くな

い。しかしこの道は地元の間でも知らないところらしく、人の気配は絶えて久しい。隠れて移動するのにもってこいの道であった。この獣道では毒蛇や毒虫がいるかもしれない、一行は急ぎ足で獣道を踏破。夜になり、廃寺で家康たちが足を休めていると、外で見張りをしていた大久保忠佐が報告のために入ってきた。

「山中のいたるところから篝火が？」

「は。恐らく連中、山狩りをして我らを探しているものと思われま

す」

この廃寺を案内した半蔵曰く、この山中には伊賀の上忍 『百  
地』 『藤林』<sup>しやうぼし</sup>そして『服部』のそれぞれの一族が有する、それぞれの一族しか知らないこの建物のような隠れ家があるらしい。このよ

うな隠れ家は一族の中でも直系の人物しか知らないという。  
「あるとは思えませぬが、偶然連中がこの隠れ家に辿り着いてしま  
う・・・ということが無きにも非ず。気を入れて見張りましょう」  
家康と侍女たち、そして茶屋は廃寺の中で休み、家臣団と聖一は交  
代で廃寺を守備する体制をとった。弓を使う聖一と夜目が効く半蔵  
は木の上で遠くを見張り、小姓を含む徳川武士たちは家康たち非戦  
闘要員を背に、廃寺の中から外を見張った。これは篝火を外で焚く  
ことで敵から発見されるのを防ぐための措置である。

一行は極度の緊張の中、眠れぬ夜を過ごした・・・

幸いにも隠れ家が発見されることはなく、朝を迎えることができた。  
ともかく、分かったのはすでに明智勢によって『信長死す』の知ら  
せが広まっているという事 ついに伊賀を突破し、伊勢に辿り

着いた徳川一行は茶屋の伝手で入手した船に乗り、三河への帰路に就いた。

しかし、彼らに休まる暇はない。関東の雄・北条家との対決が待っているのである……

## 天正壬午の乱の章 第一話

関東・・・現在の日本国の首都である東京が置かれている地方である。この地は足利尊氏によって室町幕府が開府されて以降、常に争乱と隣り合わせであった。

京に幕府を開いた尊氏は関東を治めるための出先機関を鎌倉に置き、長官として息子・基氏を派遣した。これが『鎌倉公方』の始まりである。鎌倉公方の補佐には『関東管領』が置かれ、上杉氏が代々世襲した。

鎌倉公方は相模・武蔵・上野・下野・下総・上総・安房・常陸の八ヶ国（まとめて関八州と称する。それぞれ順番に現在の神奈川県・東京都及び埼玉県・群馬県・栃木県・千葉県全域・茨城県）に甲斐・伊豆を支配し、これに後に加えられた出羽・陸奥を治めた（それぞれ山梨県・静岡県の伊豆半島及び東京都伊豆諸島・青森県・岩手県・宮城県・福島県全域・秋田県・山形県全域）。

初代鎌倉公方・足利基氏は兄で二代將軍の義詮と協力して関東の統治に努めたが、彼の子の氏満、孫の満兼と代を重ねることに対立していった・・・しかし反乱が起ころうとするたびに関東管領上杉家の歴代当主が文字通り命を懸けて制止して事なきを得ていたが、ついに四代鎌倉公方・持氏の代には持氏が対立を深めていた時の関東管領上杉憲実を討伐する軍を憲実の領国上野に派遣。対して当時の六代將軍足利義教は関東及び周辺の諸將に憲実救援を命じ、ついには持氏を討ち滅ぼした。1438年から翌39年まで起こったこの戦乱を永享の乱という。

その後鎌倉公方は再興を果たしたが、混乱を経てその機能は下総国の古河城に移り、『古河公方』を名乗るようになる。8代將軍義政はそれに代わる存在として、異母兄の政知を派遣したが、当時の関東の情勢不安から鎌倉に入ることができず、伊豆の堀越に居を構えることになった。この事からこちらは『堀越公方』と呼ばれた。

「しかし、我が曾祖父である早雲公・祖父氏綱公そして我が父氏康が両公方、関東管領といった旧勢力を討ち破り、この小田原城を中心とした北条帝国を築き上げたわけだな」

「大殿、誰に向かつて喋っておられるのです？」

小田原城、本丸。武田信玄・上杉謙信でも攻め落とせなかった天下の名城の主の名は北条氏政という。立派なカイゼル髭を蓄えた立派な体格の彼こそ、戦乱に荒れていた関東を制覇しかけている北条家の四代当主である。

「うむ？ワシにもよくは分らんが、喋らなければならん気がしてな。そしてワシは『大殿』ではなく『皇帝』であるからして間違うことないように。ところで我が子・氏直率いる北条帝国軍はどうしておる？」

氏政はなぜか北条家を『北条帝国』当主である自分を『皇帝』と呼ぶよう家臣や民に強要する。別に呼ばなかったからとはいって罰があるわけでもないというところが、彼の人の好さを表しているかもしれない。

実はどこかのゆるゆる美少女皇帝を意識しているのかもしれない。  
・まさかね。

「氏直様は神流川で滝川一益を破り、現在は上野諸將の掌握に努めておられるようです。この分では、信濃・甲斐の平定も容易いかと家臣の報告に、氏政は満足げな笑みを浮かべた。

「今回の遠征には、我が北条帝国軍の威光がかかっておる」

本能寺の変をいち早く知った氏政の決断は素早かった。嫡子・北条氏直を総大将に5万余の軍勢を、不可侵条約を結んでいた織田領・

上野に派遣。滝川一益を打ち破ってこの地を制し、続いて織田の諸将が逃げ散って空白地帯と化した信濃、そして川尻秀隆の守る甲斐を制する腹積もりであった。

徳川家嫡子・徳川松姫とくがわまつひめの両親はとても仲良しだ。それは彼女にとっても嬉しいことであった。自分と弟しかいないときは、いつでも寄り添っている。範囲的には手が届くところには2人は必ずいる。夜はいつでも2人はいつでも一緒に寝る。彼女と弟は別の部屋で寝る。ちなみに夜の間の両親の部屋には行ったことがない。近付こうとすると、どこからともなく半蔵がやってきて、部屋に連れ戻されるからだ。その時は絶対半蔵は「姫にはまだ早いです」と言う。以前、両親の部屋から漏れ聞いた声から彼女なりに察して半蔵に「母上は父上に虐められているの？」と口にしたところ、半蔵は真っ赤な顔で「そのことはお忘れください！」と叫び、小さな声で「鷹村・・・コロス！」と物凄くドスを効かせた声で呟いていた。

・・・翌日、父がボロボロになって修練場に転がっていたが、何か関係があるのだろうか？

領国に戻った徳川家は、ただちに軍を動かした。家康率いる本隊は、

光秀を討つべく尾張方面に、聖一率いる別働隊は新たに領地になった駿河国に入った。信濃方面で戦線を展開させ、伊豆でも軍を展開させている北条軍に備えるためである。江尻城に入城した聖一は甲斐を治める織田家臣・河尻肥前守秀隆かわじりひぜんのかみひでたかにもとへ、信濃へ向かうであろう北条軍に対してともにこれに当たろうという書状を持たせた使者を送るが

「河尻殿はすでに討死!？」

「は。河尻殿はどうも甲斐の国人衆からの評判が悪かったようで、信長公が斃れたと知れると同時に武田旧臣を中心にした一揆衆に甲府城を攻められ・・・」

詳しく聞くとところによると、信長から甲斐を預かった河尻秀隆は武田旧臣を『自分に申し出れば以前の給与で召し抱える』と触れをだし、その言葉に釣られてやってきた武田旧臣を処刑するというやり方で甲斐の国人から恨みを買っていたらしい。その不満が高まって、ついに爆発し　　といったところだろう。聖一が発した使者は甲斐に到着する直前に、ある人物から教えられたという。

「ところで、ですな・・・一揆の主導者であった三井弥一郎みついやいちろうと初鹿野信昌ののぶまさ両名からと思われる書状を預かってまいりました」

それを聖一が開くと、確かに三井・初鹿野両名の署名が記されていた。それによると、彼らは河尻に代わって徳川家に甲斐を治めてほしいと記され、徳川家が甲斐に入ったあかつきには彼ら武田残党軍は徳川家に降るというものであった。恐らく、織田信長による武田征伐の際に、武田の残党を徹底的に滅ぼした織田家に対して徳川家は彼らを保護したからではないだろうか・・・と聖一は推察した。

「畏・・・という可能性は？」

「多分だけど、ないと思う。武田が滅び、河尻殿が討たれた以上、甲斐に徳川家に対抗できる戦力はない。私たちが甲府城を占拠するのは容易い」

駿河方面の軍を一任されている聖一は諸將を呼び集めて改めて軍議を開いた結果、甲斐への行軍を決定。江尻城と伊豆方面への抑えを

大久保忠世に任せ、その旨を本隊へ通知した後、江尻城を出立した。

甲斐への進軍が江尻城内の者に知れ渡ると、彼らは進軍準備の為に一斉に動きだした。そのなかで、一人の少女が具足の音を鳴らして奥の間へ歩いていった。

健康的に焼けた小麦色の肌と短く刈りこんだ黒髪でボーイッシュな印象を与える少女は、本来は快活によく笑う表情を緊張に固めており、彼女がまだこの具足と腰に佩はいた刀の重みに慣れていない事が窺えた。

彼女は奥の間と廊下を遮る襖の前に立つと入室の許可を得て部屋に入り、目的の人物が一人にいるのを確認すると、口を開いた。

「とーちゃん！甲斐に攻め込むのか！？」

「そうだよ、秀康ひでやす。どうした？緊張してる？」

「し、してるもんか！」

少女の名は鷹村秀康たかむらひでやす。聖一の娘だが、彼との間に血の繋がりは無い。もとは浮浪児であったが、縁あって彼の養子になった。武芸の才に秀で、『松を守るのはあたしの役目！』が口癖で、聖一夫妻の子とも上手くいっている頼りになる姉貴分だ。聖一個人の養子であるので、彼女は後々聖一個人の領地を継ぐことになっている。

「攻め込む……って言っても甲斐には敵はいないから、甲府城を接收するくらいだよ。緊張することはないさ」

（とはいえ 絶対に北条軍と激突することになる。それまでに甲斐を掌握しておかなきゃ……）

敵は北条。彼らを相手にするには時間が必要であった……



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8441v/>

---

月の光と葵の乙女～天正争乱～

2011年10月1日14時59分発行